

(第3種郵便物認可)

サイ・テク 知と技の発信 こらむ

【375】

埼玉大学・理工学研究の現場

通学路で交通事故に遭い、亡くなつてきた。わが国では残念ながらもなす子供をZeroにしなければならぬ。ただ年間4千名近くの方が亡くなり定し、実現手法の体系化を進めて、まての道のりはまた遠いと言わざるを得ない。そこでまず、通学路7年に国家単位でVision ZeroからZero(ゼロ)に近づけることを掲げ、非常に多くの成果を挙げている。



くぼた・ひさし 1958年生まれ。東京大学大学院工学系研究科(都市工学)修了。工学博士。埼玉大学助手、助教を経て2005年4月から現職。専門は都市交通計画、交通工学

通学路 Vision Zero

大学院研究科 久保田尚教授



速度抑制のためのハンブ実験—さいたま市

日本の交通事故の特徴は、市街地での歩行者・自転車利用者の死亡事故が際立って多いこと、また、生活道路と言われる細街路での事故が多いことである。そこで、各種の生活道路対策などを体系化

し、「通学路総合交通安全マネジメント」という枠組みで取り組みを進めることを提唱している。生活道路対策には様々なものがある。

これまで、私自身、ハンブの研究を30年以上行ってきた。速度抑制効果が抜群に高い一方で、騒音や振動の問題があると言われてきたハンブであるが、勾配部の形を工夫することにより、その問題をクリアすることができた。幸い、平成28年には国の技術基準として定められたことにより、世界的にみれば当たり前のハンブがようやくわが国でも普及するめどが立った。また、ライジングボラードという、自動昇降式の車止めもわが国での利用が始まっている。これらの手法メニューを見ながら、学校周辺のどこにどの手法を導入すればよいか、ワークショップと言われる話し合い方式で議論してい

くことを想定している。「子どもの命を守る」という目標を掲げて、まずは通学路周辺からZeroを達成し、ハンブ等の認知度を高めつつ市街地全体への普及に努めていくことが戦略的に重要と考えられる。それにより、現在大きな問題となっている高齢歩行者等の安全性も飛躍的に高まることが期待できよう。

なお、この取り組みを紹介する「通学路 Vision Zero シンポジウム」を、2019年2月1日(金)の午後1時から大宮1ニックシティ・小ホールで開催予定である。関心のある方はぜひお越しください。

共催・公益財団法人国際交通安全学会、国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所
お問い合わせ・お申し込みは国際交通安全学会(☎03・3273・7884)。